

平成25年度

岡山大学大学院保健学研究科

博士学位申請論文

内容要旨

看護学分野

秋元 典子 教授 指導

73419504

江口 瞳

平成25年6月提出

内 容 目 次

主 論 文

緩和ケア病棟入院中で余命 3 週間程度と予測されている終末期がん患者の
1 日の過ごし方に対する意思決定の内容

江口 瞳, 秋元典子

日本がん看護学会誌 27(1) 4-12 2013

主 論 文

緩和ケア病棟入院中で余命 3 週間程度と予測されている終末期がん患者の 1 日の過ごし方に対する意思決定の内容

[緒言]

人間は、自分の生き方を自由に選択・決定・実行していく自律した存在であり、その人の意思決定は尊重されなければならない。しかし、終末期には、身体的苦痛のために思考力が奪われ、決めること自体が苦痛と化すとともに病状の変化により自分の意思決定通りには過ごしにくくなる。村田は、終末期患者は他者への依存度が増したとしても、援助者との対話から知覚、思考、表現、行為において意思決定の自由が保証されるなら、自分は自律的存在であるとの認識を回復・維持できると述べている。日常生活の支援を職責とする看護者には、余命が週単位と予測されているがん患者が、今日 1 日を自己の意思決定通りに過ごすことができるよう支援する責務がある。先行研究では、余命が週単位と予測され明日の到来がきわめて不確実になってきたがん患者の“今日”に着目し、今日 1 日の過ごし方に対する意思決定の内容を明らかにしたものはみあたらない。

本研究は、緩和ケア病棟入院中で余命 3 週間程度と予測されている終末期がん患者の 1 日の過ごし方に対する意思決定の内容を明らかにし、患者が自己の意思決定にしたがい最期まで良質な 1 日を過ごすことを支援する看護への示唆を得ることを目的とする。

[方法]

対象は、緩和ケア病棟に入院し、余命 3 週間程度と予測されているがん患者 18 名である。データ収集方法は、参加観察法および半構造化面接法を用いた。

参加観察は、対象者の心身の疲労を考慮し、対象者 1 人につき連続した 2 日間のうち 1 日目の午前 2 回・午後 1 回、2 日目の午前 2 回の計 5 回実施した。病棟看護師が対象者の看護を実施する際にも対象者の看護を行いながら参加観察を実施し、実施直後に相互作用場面における対象者および研究者の言動をフィールド・ノートに記述した。

面接は、① 1 日をどのように過ごそうと決めたのか、その決定内容、② 過ごし方に対する心構え、③ 決めた理由、④ 決めた時期、などの質問で構成した研究者作成の面接ガイドを用い、身体的苦痛が緩和されているときに実施した。データ収集期間は、2010 年 3 月 1 日～2011 年 3 月 31 日の期間であった。

データ分析は、フィールド・ノートの記述内容および面接内容の逐語録をデータとし、得られた質的データの文脈を重視する Krippendorff の内容分析の手法に基づき、個別分析・全体分析の 2 段階の手順で行った。

なお、分析の全過程において、内容分析の手法に精通した質的研究者のスーパービジョンを受け、2 名の研究者間での繰り返しによる分析内容の一致性を確認し、真実性

(trustworthiness) の確保に努めた。

本研究は、岡山大学大学院保健学研究科看護学分野倫理審査委員会および研究協力施設の承認を得て実施した。

[結果]

対象者の平均年齢は 65.1 歳、面接時間は平均 36.5 分であった。緩和ケア病棟入院中で余命 3 週間程度と予測されている終末期がん患者の 1 日の過ごし方に対する意思決定の内容を分析した結果、個別分析では 191 の表題が得られ、全体分析で 31 の表題にまとめられ、最終的に 9 の大表題に集約された。集約された大表題は、【時の仕切りをして、今日 1 日を生きるという過ごし方をする】【あらかじめ何かをしようとは決めず状況に応じた過ごし方をする】【体力が維持できるような過ごし方をする】【形あるものを残せるような過ごし方をする】【楽しみを取り入れた過ごし方をする】【つらさは家族以外の他者に吐き出して平穩に過ごす】【今も死後においても大切な人との絆を断ち切らないような過ごし方をする】【残された命を他者のために使えるような過ごし方をする】【人として尊厳ある過ごし方をする】であった。

[考察]

1. 1 日の過ごし方に対する意思決定の内容の特徴

大表題【時の仕切りをして、今日 1 日を生きるという過ごし方をする】が得られたことは、対象者が、今朝の今の時点と現在と捉え、現在からその日の就寝の時点までの時間をまだ来ていない時間すなわち未来と解釈し、現在から未来に向かって過ごしていることを意味していると考えられる。現象学的時間論によれば、時間は線ではなく解釈によって質的な次元を持つと捉えられている。また、計測可能な時間と人の体感時間は一致せず、後者は個別的な内なるプロセスとして経験されるともいわれる。対象者が、朝を迎えた現在から解釈によって創りだした未来に向かって過ごしていたことは、現象学的な時間の捉え方を支持していた。本研究の対象者が、時間の解釈によって今朝から就寝までというきわめて短時間ながらも未来を創りだしていたことは、質的には未来を志向していたと考えられる。このことから、【時の仕切りをして、今日 1 日を生きるという過ごし方をする】が得られたことは、対象者が最期まで短期的ながらも未来を志向して過ごしていることを示す新規性の高い知見であるといえる。

対象者は、【あらかじめ何かをしようとは決めず状況に応じた過ごし方をする】と意思決定していた。このことは、対象者が、一見目標を持たない 1 日の過ごし方を選択したとしても、そこには決めないという対象者の意思が存在することを示している。一方、対象者は、【体力が維持できるような過ごし方をする】【形あるものを残せるような過ごし方をする】【楽しみを取り入れた過ごし方をする】【残された命を他者のために使えるような過ごし方をする】と意思決定し、目標をもって 1 日を過ごすとは決める側面も有していた。これらは、対象者が、死が迫っていると知りながらも生きることを志向し、このように生きたい、これを成し遂げたいと願い、死後も他者の中で生きる、すなわち死

の超越につながるような1日を過ごそうとしていることを意味している。本研究結果は、1日の目標の維持が希望の維持につながり、最期までその人らしく生ききることを実現させるうえで重要な働きをすることを示したといえよう。

対象者は、【つらさは家族以外の他者に吐き出して平穏に過ごす】と意思決定していた。語ることで心おだやかに1日を過ごそうと決めている意思決定であり、語る心が心のありようを変えよとの主張である。しかし、対象者は、語る相手は家族ではないとの条件をつけた。これは、家族に心配をかけたくないという対象者の配慮であり、また、適度な距離のある他人にしか改まった話はできないとの主張であろう。看護者は、最も患者に近い位置にいる他人である。最もタイムリーに患者の話の聴き手になり得る存在である。患者が語ることの重要性を示した本研究結果は、聴くことの重要性と表裏一体の関係にある。

さらに、対象者は、【今も死後においても大切な人との絆を断ち切らないような過ごし方をする】と意思決定していた。このことは、関係性の中で生きること、他者の世話をする存在であることなど、人間の基本的なあり方を全うしたいとの対象者の願いの反映であり、死の超越でもあると推察できる。対象者は、【人として尊厳ある過ごし方をする】と意思決定していた。これは、身の周りのことが自分でできなくなった時、それを認め、投げやりにならず、他者の力を借りて、わきまえと気位を失わずに最期まで生ききろうとする対象者の覚悟の反映であると推察できる。

2. 看護支援への示唆

対象者は、今日1日、今日1日と仕切りをして1日単位で過ごすと思決定していた。このことから、看護者は、1日1日の生活が患者にとって悔いのない最良の日となるようにケアする必要性が示された。また、対象者が一見計画性のない1日の過ごし方をしたとしても、それを患者の1日の過ごし方に対する意思決定の内容として尊重する必要性が示された。対象者は、希望をもって1日を過ごすと思決定しており、達成可能で身近な目標を患者とともに掲げることは、希望を維持する方策として有益であると考えられる。ただし、希望を育み、維持するには、身体的苦痛の緩和が不可欠である。また、看護者は、日頃から患者と適度な距離を保つことが必要であることが示唆された。

以上のような看護を実践することが、緩和ケア病棟入院中で余命3週間程度と予測されている終末期がん患者が自己の意思決定にしたがって最期まで良質な1日を過ごすことを保証することにつながると考える。

[結論]

緩和ケア病棟入院中で余命3週間程度と予測されている終末期がん患者の1日の過ごし方の意思決定は、9つの大表題に集約された。本研究の対象者が、時間の解釈によって今朝から就寝までというきわめて短時間ながらも未来を創りだし、その未来を志向していたことが明らかにされた。対象者の意思決定を尊重し、最期まで良質な1日を過ごすことを保証するための看護実践が必要である。